1 あばばて，かなんわ－山の学校の夕暮れ－

「こんな工夫・あんな工夫」と題しての最初の項目ではあるが，工夫といえるようなものではない。最初の学校で「これは気をつけなければいけない」と思ったこと，すなわち指導するときの心構えの１つなのである。

昭和 33 年４月，

「奈良県御杖村公立学校教員に採用する

２等級４号給を支給する

御杖村立神末小学校教諭に補する」

という辞令書を，木造の奈良県庁内の教育委員会学務課で「３年間僻地教育に従事します」という誓約書と交換に受け取り，私の教員としての生活がスタートした。

神末小学校は，全校児童約 300 名，３年生と５年生が２学級，他が１学級ずつ，そして４㎞ほど離れたところに１・２年複式の分校を持つ山の学校である。ここに勤務していたのは，左路喜市校長先生と９人の教諭，用務員１名。教頭職が法制化される以前のことで，専任の教頭はおかれていなかった。

私が，担任を命じられたのは，３年赤組の 33 名であった。教員になるという小さいころからの夢の実現のため，教育実習には特に精根こめて取り組み，それなりのものを身につけたと思っていた私であったが，この年に告示された新しい学習指導要領で誕生した道徳と７つの教科すべてを１人で担当するという生活にはとまどいが多かった。こんなことの解決のためにと，先輩の後をついて歩き，一挙手一投足に目を配り，他学年の教室をのぞき，貪欲に何かを得ようとする毎日であった。

週に1度ほど巡ってくる宿直の夜は書き入れ時である。1晩に2回の校内巡視，全教室の鍵を持ち，すべての教室に入る。戸締りの確認，暖房の後始末のチェック（この学校の暖房は2つの大きな火鉢で木炭は児童1人あたり半俵を家庭から納めることになっていた），ついでに，掲示物を見せてもらう，新出漢字を書いた小黒板，室内の整理整頓など多くを学ぶことのできる研修の時間であった。

それから間もなく，村教育委員会の学校訪問があり，理科の授業を見ていただくことになった。当日の学習のめあては，「日の出・日の入りの場所や時刻は季節によって違っていることを調べる」であった。

子どもたちの生活時間から考えると，日の出の記録をとらせることは難しいと考えた私は，西に聳える山々を描いた図に，毎日の日の入りの場所とその時刻を記録させることにし，そのやり方を説明した。

そのとき，子どもたちからは，

「そんなん　あばばいわ」

「あばばて　かなんわ」

という声が一斉にあがった。

「あばばい」それは，私が初めて耳にする言葉であり，それが「まぶしい」を意味する言葉であることを理解するのには少し時間が必要であった。小さな奈良県であっても，所により異なる言葉がある。このような地域に根づいた言葉が理解できなくてはならないということを思い知らされたものであった。

この授業は，私にもう1つ大切なことを教えてくれた。それは，西に高い山があり日の入りの早いこの地域では，日没のころには，まだ太陽が明るく輝いているという事実を忘れていたことである。教科書には，遠くの山に沈もうとしている赤い夕日が描かれ，その様子を記録している子どもたちの姿があった。いくら山が多いとはいっても，

多くの人たちが平野部に住む我が国である。教科書の記載も当然のことであろう。しかし，教科書を学ぶのではなく，自然に興味や関心をもち，それを観察し，何かを見つけていこうとする理科の学習の中で，子どもたちの生活空間であるこの地域の特性に目を向けることを忘れていたことを厳しく自己反省させられたひとときであった。

どの教科であっても，どんな時間であっても，

「今，この地域では，この学校では，この学級では，この子には…」

と考えなければならないということを学んだのである。